

考古資料館展示替え試案

前 迫 満 子*

A Tentative Plan for Alternating Exhibits in the Archaeological Data Hall

Mitsuko MAESAKO

平成7年度から考古資料館の担当となり、館内所蔵の資料について把握・説明すべき立場となった。考古学を専攻する身ではあるが、県内の古代史全般について精通している訳ではない。当然ながら説明できない資料がたくさんある。それでは困るので、とりあえず一つ一つの資料に当り、最小限のデータ（出土遺跡名・所在地・時代・報告書など参考資料の所在）を覚えることに努めた。また、入館者からの考古一般の質問や展示内容についての質問などもあり、それらに答える過程で少しずつ勉強する機会を得ることになった。

短期間ながら考古部門を任せられ、窓口で入館者との接点を持つに至って、相手の欲しているものを提供できない歯がゆさを感じたことは一度や二度ではなかった。我が身の知識不足は勿論、参考資料の不足の感是否めないのである。それぞれの資料の背景がわかるにつれて、また多くの館外の研究者たちの評価を聞くにつれ、所蔵資料の価値の大きさを再認識することにもなった。

是非多くの人々に利用していただきたい。そのための手立てはいろいろあるはずである。中には、すぐには解決できない事・効果が目に見える形で現れないが重要な事もある。それらを解決しなければならぬ当事者である自分自身への課題として、まず現状を把握する意味でここに展示資料案内を行い、それに伴って一試案として展示替えの可能性を探ってみたい。但しここでの展示替えはハード面はある物を工夫するという前提で、内容的なものにとどめることとし、展示替え以外の館整備についてはいくつかを後に述べる。

I. 展示の現状と資料価値

1. 現在の展示方針

「かごしま県のむかし」というテーマを掲げ、県内各地で発掘された旧石器時代から江戸時代までの考古資料が時代順に並べられている。各々の時代の中では、土器・石器・装飾品などの用途別に展示される。個々の資料に関しては、付属のカードに名称・該当する時代・出土遺跡名・その所在地が記載され、資料によっては簡単な解説文や関連資料が掲示されている。解説文などの表現は、小・中学生が理解できるものが理想であるが、義務教育で僅かしか扱わない考古学という特殊性も手伝って、大人でも予備知識が無いと理解しにくい状況といえる。「建物先にありき」で、解説のスペースが確保しにくいこともこの状況に拍車をかけていると思われる。

展示資料は鹿児島県教育委員会所有のものに限り、埋蔵文化財センターとの協力関係で一部新資料が展示されるなど入れ替えが行われているが、昭和56年の新博物館発足に伴う考古部門の分館化

法として無くてはならない絶対年代決定の鍵となる火山噴出物（鍵層）を豊富に持つ火山国鹿児島県は、編年の信憑性で他県をリードし得る立場にある。これをアピールしない手はない。まして自然史系の博物館を本館に持つ当館の場合、一般の考古博物館では補強しにくい自然史からのアプローチができるのである。これは大きな利点である。当館の導入部に土層断面の標本を置くことで、時代のものさしの役目も果たす。その断面に土器などが残っていれば遺跡で遺物が埋まっている様子などが理解してもらいやすくなる。また大昔、人々がどのような環境で過ごしていたかを説明する時にも視覚に訴えて理解しやすくなると思われる。

b. 旧石器時代（～約12,000年前）－展示位置④

人々は狩猟・採集で食料を手に入れていた。土器はまだ作られておらず、道具として残っているのは狩猟具としての尖頭器・ナイフ形石器・削器（スクレイパー）など石器が主になる。旧石器時代の終わり（約13,000～12,000年前）には細石器が使われるようになる。

日本における最古の旧石器文化としては、東北地方で約600,000年前のものが確認されているが、鹿児島では約22,000年前に噴火した始良カルデラの噴出物であるシラスが非常に厚く堆積しているため、容易にそれ以前の文化層にたどり着くことができない。しかし、過去に発掘例が無いわけでもなく、つい最近喜入町の帖地遺跡でシラスの下から古い文化層が確認されるなど、条件によっては調査可能なことが証明され、その成果が期待されている。

※石器の使用法がわかりにくいので、図化するなどの工夫が必要であろう。

c. 旧石器時代から縄文時代へ（約12,000～10,000年前）－展示位置⑤

縄文時代には、人々が土器を作り始め、主に打製石器を使い、ほぼ一定の場所に住むようになる。道具も増えて多彩になる。

近年桜島起源の火山灰層（約11,000年前）より下の、従来旧石器時代末の細石器が出土する通称チョコ層から縄文文化の特徴と言える土器・石器・住居跡などが次々と発見されている。遺跡によって、細石器だけ出土、細石器と土器が出土、細石器と土器・石鏃が出土、土器・石鏃だけが出土などいろいろなパターンがあり、旧石器時代と縄文時代の明瞭な線引きは難しい。いずれにしても、現代でもそう見られているが考古学的に見ても辺境の地と考えられてきたこの南九州で、全国的に見てもかなり早い段階で縄文文化が育っていたことがはっきりしてきている。

土器が出てきたこの時期は縄文草創期と呼ばれ、縄文時代は早・前・中・後・晩期の5期区分から6期区分にするのが通常となってきた。

※鹿児島のこの時期の資料は、出土層にかぶさる直上の層が鍵層「薩摩」としてはっきりしており、全国の指標になり得る非常に貴重な資料といえる。当館にある加治屋園遺跡（鹿児島市）・伊敷遺跡（鹿屋市）以外のまとまった資料は、梶ノ原遺跡（加世田市）・掃除山遺跡（鹿児島市）など他の市町村の資料で貸出を依頼することは難しいと思われるが、レプリカなり、写真なりで参考資料として是非紹介すべきものと思われる。後述するが、南九州の縄文土器の特徴である「貝殻施文・平底が早くから見られる」という点を説明するために貝殻の背が押圧されかつ平底の奥ノ仁田遺跡（西之表市）の草創期の土器も欠かせない資料である。また時代区分は現在も揺れ動いているので、明確な表示は避け、旧石器時代から縄文時代へというような

大枠で捉えた方が良いのかもしれない。

d. 縄文時代（約12,000～2,300年前）－展示位置⑥

草創期については前述したのでここでは早期以降について述べる。

早期も近年全国の注目を集め始めている。以前から、約9,000年前という古い時期に円筒・角筒という形で、なおかつ尖底ではなく平底の土器が多く見られるという特異さは知られていた。また、土器表面に付く文様も縄目ではなく貝殻によって施されたものがほとんどを占め、縄文土器のイメージにはそぐわないことから貝文土器と呼ぶ人もいるこの伝統は独特なものである。このルーツは草創期にまでさかのぼり、後世まで続いていく。

このような背景の中で、現在も調査中である上野原遺跡（国分市）の発掘成果が明らかになるにつれて早期の平椀式の時期には非常に成熟した文化が花開いていたことが判明した。出土遺物には土偶・耳栓（耳飾り）・異形土器・異形石器・多量の壺形土器などがある。当館にはこの時期に相当する深鉢形土器が展示されている。貝文土器の中で数少ない縄文が施された端正な土器であるが、壺形土器もやはり非常に整って美しい。これまで、弥生時代になって貯蔵用として使われ始めた、つまり蓄えのある、生活形態としては一歩進んだ時代に現れると考えられていた壺形土器の使用が約7,500年も前に定着していたのである。

※上野原遺跡は非常に多様な文化を示す資料が出土しており、当時の村の生活を想像するには好都合である。できれば、一括資料として種々の資料を展示したい。土偶などは一点しか無いため貸出は許可されないかもしれないが、この遺跡の資料はレプリカを作っても是非公開する必要がある。

前期は、それまで地域性豊かな文化を育んできたこの南九州の地に大きな変化がもたらされた時期である。約6,300年前、現在の三島村にある鬼界カルデラが大噴火を起こした。この時の火山噴出物は広範囲に降り積もり、全国的に通用する鍵層として有名であるが、火砕流を初めとするそれが地元を与えた被害は甚大なものであったと思われる。この噴火によってそれまでの土着の文化は壊滅状態となったであろう。これを機会に、環境が少しずつ戻るにつれて外部の文化が流れ込んでくることになり、それまでの地元の文化を塗り替えてしまうのである。

中期も前期同様に外部の影響が続く。その範囲も九州を飛び出して瀬戸内系の文化の影響が多く見られるようになる。他時期に比べるとこの時期の様子は明らかでない部分が多い。

後期になると外部の影響を受けながらもまた独自の文化が力を持ち始める。市来式土器の時期は非常に活発に活動しており、土器の分布は北は中国・四国、南は大海を隔てた沖縄にまで広がっている。丸木船などを使っていろいろな地域と活発に交流したり、貝塚を作るなど海に深い関わりを持つと考えられる。草野貝塚（鹿児島市）からは骨製の釣針・かんざし、軽石製の舟・動物、真珠などが出土している。土器も深鉢だけでなく祭祀的な色合いの強い台付き浅鉢・土瓶のような注口土器が見られるなど器種が増えている。このように使った道具類から見ても多彩な文化を持っていたことがわかる。

※市来式期は鹿児島を代表する文化期であるが、当館には土器すら典型的なものが無い。他地域との交流を示す意味でも一括資料が必要と思われる。ところがポピュラーな土器型式であるに

も係わらずその時期の生活状況が良くわかる遺跡となると数が限られてくる。その中で最近発掘された干迫遺跡（加治木町）は質・量共に大規模な遺跡で、かつ他地域の磨消縄文系の土器も多量に出土しており、地域交流の点からも興味深い遺跡となっている。当館の展示状況を見ると、それぞれの資料を時代順に並べており、流れとして見たり、それぞれを比較したりすることはできるが、ある時期に限って生活を復元する資料に乏しい。この遺跡は住居跡・河川跡なども確認されており、出土品の種類も豊富である。ジオラマで生活環境ごと遺跡復元してみてもはどうだろうか。そして多量の土器・石器・装飾品などの資料を数で圧倒する形に展示して当時の力を感じるポイントにしてみたい。

晩期は弥生時代への過渡期であり、稲作の資料が確認され始めて、時代の線引きについて様々な論が戦わされている。土器を見ると文様はかなり簡素化され、黒色の磨いたものが多くなる。また、深鉢・鉢・浅鉢・皿など器の種類が豊富になってくる。この時期の土器には蓆目・網目・布目などの圧痕が器表面に残る組織痕土器がある。これから当時の編物や織物を復元することもでき、織物の起源を考える上で重要な資料となっている。

e. 縄文時代の石器 ー展示位置⑦

狩猟に使う石鏃、動物の解体などに使うスクレイパー（削器）や石匙、木の伐採に使う石斧、調理用具として木の実などを磨りつぶす磨石・石皿、網の錘や編物を編む時に使う石錘などが見られる。よく縄文時代は打製で弥生時代は磨製と言われるが、時代では区別できない。石斧は打製で薄手のものは土掘り具と言われており、縄文時代でも伐採用のものは磨製であり、草創期ですら局部磨製石斧が存在する。石鏃も最近では縄文の磨製石鏃が確認されている。用途によって異なる傾向にあると言えよう。

鹿兒島で特徴的なのは軽石製品が多いことである。加工しやすいので、装飾品や用途はわからないが動物・舟などのミニチュア版の模造品を作る材料になっている。

※石器はそのものを並べてもなかなか使用法が浮かばない。矢の軸や石斧の握りなどの木質部分などを復元して図化したり、実際に利用してもらえぬコーナーを作ってみてはどうだろうか。一つの試みとして資料と同じ材質の自然石を持ってきて、入館者に木の実などを磨りつぶしてもらうことで現代の石皿・磨石を作ってみる。実験に参加した延べ人数・時間などを表記できれば、展示品のようになるまでどの程度の労力が必要なのか実体験できよう。

f. 縄文時代の装飾品 ー展示位置⑧

縄文人たちがいろいろな物を使って身を飾っていたであろうことは土偶の装飾などから類推できる。首飾り・耳飾り・腰飾り・髪飾りと用途は同じでも時代によって形態には流行があったようである。早期には土製の耳栓（じせん）と呼ばれる今で言うピアスのようなはめ込み式の耳飾りがある。前期に特異的なのは中国の玦に似た玦状耳飾（けつじょうみみかざり）であろう。晩期になると管玉や小玉をつないで首飾りにしていたらしい。材質は歯・骨・石などで、石では硬玉と呼ばれるヒスイのような緑色の美しい石が特に好まれていたようだが、南九州には産地が無く、色の似通って加工のしやすい蛇紋岩などが良く使われたようである。

※当館には石製の管玉・小玉・勾玉、岩笛がある。小さな石に細い穴をどうやって開けるか。こ

の一年で何度か質問を受け、文献を調べてみた。論理的には理解できていてもいま一つ実感が湧かないし、その通りに説明しても入館者は納得しない。石は硬いという漠としたイメージと実際に実行してその通りになるのか確証がない為であろう。これも解説者・入館者共に共通体験を持つことで納得できると思われる。前述の石器の部分でも述べたが、入館者の質問に多いのが石の材質と加工の方法である。これは一つの体験コーナーを作って疑問に答える必要がある。

※装飾品には骨角器や貝製品があるのだが、これらの資料も当館には不足している。

g. 集石遺構 - 展示位置⑨

早期から前期の遺跡でよく見られる。いろいろな形態があるが、食物を焼くなどの調理施設と言われている。

※縄文時代の衣・食・住というくくりで一つのコーナーが欲しい。

h. 弥生時代(約2,300~1,700年前) - 展示位置⑩

水稻栽培、金属器・織物の使用など大陸の影響を受けて新しい文化が始まる。米を蓄えることで持てる者と持たざる者という身分差・集落差が生じ、国という社会組織が出来上がっていく。主に北部九州から広がった稲作文化はほとんど時間差無く各地に伝えられたことは前期の土器を比べればわかる。しかし、鹿児島はシラス台地という水稻栽培には適さない条件に阻まれて他地域ほど発展・定着することは難しかったと思われる。けれども人々の交流が途切れたわけではなく、土器には後も外部の影響が認められる。また、北部九州の甕棺墓からよく出土する貝輪の原料は南海産の貝であり、これらの貝の半製品が出土した高橋貝塚(金峰町)に貝製品をめぐる交易の中継地点の役割をみるのである。

ところで稲の存在を示すものは土器についた粃の圧痕、土壌分析におけるプラントオパールの確認などがあるが、水田耕作を行っていたかどうかは農機具の存在を示さなければならない。木製品は残存しにくいので石包丁などは有力な証拠となろう。

前期土器は北部九州のそれとほぼ同じであり、中期にも北部九州の土器が入ってくる。その一方でこの時期在地の土器が出てくる。現在では大隅半島に吉ヶ崎式・山ノ口式、薩摩半島に入来式・一の宮式と地域差があると言われている。当館に展示してある吉ヶ崎式土器8点は同じ焼失家屋跡から出土した一括資料である。同時期に一家族が使用した資料という点で価値は大きい。

その他で眼をひくのは大きな甕棺であろう。これも北部九州の影響で、それまで穴を掘って直接埋葬していたのが大型の甕を棺桶として使用した。下小路遺跡(吹上町)で唯一人骨が残った甕棺が出土している。

※弥生時代の資料は中期吉ヶ崎式を除くと前期・後期がやや手薄である。また弥生時代を語る上で稲作は切り離せないので、北部九州と比較する為にも前期土器や稲作に関する資料(稲のサンプルなど)を充実させたい。

i. 弥生時代の石器・装飾品 - 展示位置⑪

弥生時代を代表する石器に石包丁があることは先に述べた。その他石鏃・石斧・石鎌などがある。石鏃は朝鮮系の磨製石鏃になるが、磨製が全て弥生とは限らないことも前述の通りである。

装飾品には飾り玉・勾玉などがあり、材質としてはガラスが登場する。軽石製勾玉は南九州なら

ではと言えよう。勾玉には土製もある。鏡の出土数は極めて少ない。弥生の装飾品といえば広田遺跡（南種子町）の貝製品が大陸との関わりを感じさせる好資料なのだが、ここでも貝製品の資料不足が気になる。

j. 丸木舟 ー展示位置⑫

これは奄美大島の民俗資料である。パネルにも記載されているように縄文時代の舟を類推させるには良い資料と言える。

※縄文時代の舟そのものは出土していないが、軽石製の舟の模造品が出土している。これを一緒に展示することで相乗効果を期待したい。

k. 古墳時代（約1,700～1,300年前）ー展示位置⑬

この時代区分は埋葬型式として高塚墳を作ることに由来する。ほぼ全国的に見られる高塚墳が鹿児島にも伝わるが、県全体には広がらなかった。他の地域には見られない南九州特有の墓である地下式横穴・地下式板石積石室・立石土壙墓が作られるのである。地下式横穴にはこれも地域色豊かな軽石製の石棺が納められていることがある。それぞれ一部地域を除いて分布域が異なっており、地下式板石積石室は熊襲の墓で、地下式横穴は中央政権に従えられてしまった隼人の墓という説がある。では畿内の高塚墳はどこに分布するかというと大きく二つの地域に分かれる。志布志湾沿岸と北薩の長島・阿久根・川内である。長島の古墳は積石塚であり、畿内型の古墳としては志布志湾沿岸にのみ前方後円墳・円墳が存在することが知られてきたが、近年川内市に古墳が確認され、1990年阿久根市で4世紀中頃の畿内型竪穴式石室がそれも九州でも最大規模のものが発見されたことで西海岸側にも分布が及ぶことが判明し、当時の中央政権との関わりを考え直す時期が来ている。なお古墳に伴う副葬品は他県に比べて少ない。鉄剣・鉄鏃・刀子などが主となるが、その他に甲冑や土師器・須恵器、鏡や玉類などがある。特殊な物としては蛇行剣が挙げられよう。埴輪も現在、飯盛山古墳（志布志町）と横瀬古墳（大崎町）の2ヶ所から出土するのみで、形象埴輪に関しては、横瀬古墳（大崎町）でのみ出土が確認されている。一方では玉類・金環などの装飾品が豊富に出ている長島の古墳もある。

南九州の古墳時代の墓制には非常に地域色が出ている。蝦夷と並んで中央になかなか従わない熊襲と何とか勢力を広げようとする中央政権の確執を墓制の分布状況に見る思いがする。このような関係は当時使用された土器にも表われ、全国的には土師器・須恵器を使うこの時期に在地の弥生土器の流れを受け継いだ成川式土器が、影響を受けながらも長く使用されるのである。

※墓制の解説で中央との関係がある程度推測されるが、それと土器が連動していない。時代順に並んでいるわけでもなく、ややわかりにくい感がある。薩摩国・大隅国が設置されるという大きな変化があったこの時期を、在地の資料と中央の影響を受けた資料という整理法で表現できないだろうか。

※古墳時代の一括資料として展示されている成川遺跡・松ノ尾遺跡を解説するスペースが少なく、他の資料の部分にはみ出して整合性が無い。展示室のスペースは限られているので、ケースの配置替え・壁面の有効利用などの工夫が必要であろう。

1. 奈良・平安時代（約1,300～800年前）－展示位置⑭

中央政權に抵抗していた人々も文化の波に取り込まれていく。全国が支配下に治められ、各地に国分寺が作られる。鹿児島では川内市に薩摩国分寺、国分市に大隅国分寺があった。当時文字を使えるのは役人や僧など特殊階級に限られていた。土器に文字が書かれたり、刻まれたりした墨書土器や刻書土器が多量に出土する所はそのような人々のいた所であり、両国分寺の資料にもそれらが見られる。同様の意味で瓦も見つかる。

m. 鎌倉・室町時代（約800～400年前）－展示位置⑮

島津氏が12世紀にこの地に来てから地元豪族との争いが繰り返され、結果として各地に山城が築かれる。中世の山城は今も各地に残り、史跡公園にするなどの処置が採られている所もある。この頃中国・朝鮮との交易も行われ、青磁・白磁などそれらを示す品々が数多く出土している。

n. 江戸時代（約400～130年前）－展示位置⑯

島津氏に治められた薩摩藩の時代である。島津氏の居城となる鹿児島城（鶴丸城）から出土した当時の生活を物語る様々なものが一括資料として本館に展示してある。

※知名度の高い薩摩焼について系譜や窯址の分布図など、より詳しい説明を加えたい。

※本館自体も鹿児島城の二ノ丸跡に建てられたものであり、近辺は当時の中心地である。古地図などを参考にして当時の地理的状況を復元した図を作りたい。

展示品の案内は以上で終わるが、館に鹿児島県の名が付きながら全く空白の部分が一つある。南島の文化である。特に奄美以南は土器編年を見ても本土と全く異なる為、これらを展示するととなると別個に広いスペースが必要になるが、パネルなどで少しでも内容紹介する、またはどこかのコーナーで比較資料として使うなどの方法をとってみたい。

最後に、江戸時代の後に来る資料として、本館そのものを挙げるができる。明治16年に県立興業館として建設されて以来、いろいろな役割を果たしながら、大正・昭和・平成へと受け継がれてきた貴重な建物である。太古旧石器時代に始まって現代に至るまで連綿と繋がる歴史を全て集約・内在している資料館というのは他には無いのではないだろうか。そういう視点に立つ時、この資料館の存在を改めて貴重なものと感じるのである。

II. 資料館の機能整備

1. 期待されるもの

本館を訪れる人々は何を期待して来るのだろうか。考古学ブームと言われて久しいが、今では発掘調査が新聞記事になるとその遺跡を見学しようとする人たちも少なくないらしい。吉野ケ里遺跡（佐賀県）や三内丸山遺跡（青森県）の人気は、今まで埋蔵文化財保存に及び腰だった行政を動かして余りある力となっている。このような現象を見るにつけ、何もかも満たされたような、望むものはさしたる苦勞無しに手に入る今の環境の中で、レジャーも行き着く所まで行ってしまった人々が次の獲物を探しているような気にもさせられ素直に喜べないことがある。しかし、いずれにせよ興味を持たれていることは喜ぶべきことである。また考古学に携わる仕事をしていると必ず、ロマ

ンという言葉を目にするのだが、未知なるものへの憧れをかき立てる分野であることには間違いのないであろう。その分野に身を置く自分を振り返っても、やってもやっても正解にたどり着かない奥の深さについつい引き込まれて、分からないことを面白がっていることに気付く。そこに何か面白いものはないか、これがみんなに共通した価値観であろう。その中で人の好みはそれぞれであり、同じものを見ても感じ方は異なる。理由はどうであれ、訪れる人がいる限り、その人の欲求に答えるのが本館の使命であると考えてる。

2. 機能充実の基本作業

ではその欲求にどう対処するか。考古学は過去の人々が残した物を使ってその生活を復元する学問である。対象とする時代も過去は全て含まれるし、内容的には人間の生活全般を含む。そのことを踏まえて人間学だと理解し、展示物の後ろに人間を感じさせるものにできれば、同じ人間の興味を引くのではないだろうか。非常に抽象的な表現で具体性に欠けるが、そのような応用編に入る前に最低限やっておくべき作業として現状変更したい点をいくつか挙げる。

a. 収蔵資料目録の完備

それぞれの資料が何であるのか、その履歴をしっかりと把握して、利用者に提供できるようにする。名称、時代、出土遺跡名、遺跡所在地、発見（調査）年月日、発見（調査）者、所有者、本館に収まった経緯、貸出・返却の有無、参考文献、写真、実測図、展示場所の表記などを確実に記載し理解することで、その資料をどう生かせばよいかがおのずとわかってこよう。それに伴い詳細を記録した報告書を揃える。これは最低でも本館資料の記載された物は全て必要である。また、県立の施設である以上、県下の報告書は揃えるべきである。

b. 図書資料の充実

入館者は、本館にある資料だけではなく、考古学全般に関しての質問をする場合がある。県内において考古専門の資料館と呼べるのは現在当館だけである。ここに来れば考古学の疑問は解決される、もしくは解決の糸口が見つかるという期待は持たれて当然の立場にある。まして、考古学専門の図書資料は一般の書店はもちろん、図書館においてでさえも十分に揃っていない。これは考古学の扱う範囲の広さと出版部数の少なさによるもので仕方のないことであるが、それだけに充実した図書資料があれば、それを目当てに訪れる利用者を作り出すことができるのである。基本用語・遺跡の場所などの確認のためにも、せめて辞典・地図などの参考図書や県下の遺跡紹介の資料などは最新のものを早急に確保したい。これらは展示内容を考える上でも重要かつ必須の資料になる。資料充実の手始めとして、博物館本館・当資料館2階に収蔵されている考古関係の図書資料の活かし方も考える必要がある。

c. 県下の考古学に関する情報の収集

考古学では発掘の度に定説が覆る可能性がある。いつ来ても不変の内容では、リピーターを確保することは難しい。基本展示を短期間に変えることは容易ではないが、最新の情報を収集することでそれらを速報展やミニ特別展の形に企画して、変化を持たせることはできると思う。

d. 広報

よく聞く感想に、「こんな所にこんなものがあるとは知らなかった。」がある。確かに表通りから

は引っ込んでいるし、存在を表記する目立つ看板もない。ここに来ることが第一目的と思われる県内の入館者は非常に少ないようである。一方県外からの来館者はガイドブックなどで存在を知って探して来るようだ。「他に歴史系の博物館はないか」という質問もある。県外観光客が行楽期にコンスタントにやって来るのはわずかながらでも活字となって目に触れる機会があるからに違いない。勿論内容が充実していなければいくら宣伝しても人々はやって来ない。しかし現段階でこの存在を知る県民がどれほどいるのだろうか。

博物館界限は文化ゾーンということで文化施設が並んでいる。道路も整備され博物館前の交差点には歩行者向けの施設案内の標識もある。車で通り過ぎる人にも、建物自体も見えることで宣伝効果は上がっている。考古資料館は、現在改修を終えた屋根を除いては大通りから引っ込んでなおかつ大木の影に隠れるように周りの風景に溶け込んでいる。派手に目立つ必要はないと考えるがその代わりに標識が欲しい。前述の歩行者向け標識にも入っていないのである。博物館本館横にとりあえず場所を示す看板があるが看板自体が目立たない。通行者の多い国道側には是非何らかの形で案内表示を出したい。

メディアを使っての広報が一番効果的なのはいうまでもない。広報する為には特別展を開くなり、なにかきっかけを作ることである。

以上、思いつくままに羅列した内容となってしまった。個人的な希望以外のなにものでもないし、一般入館者の期待は全く違ったものかもしれない。しかし、これは資料を提供すべき公的立場でありながら利用する県民の1人でもある人間の希望であり、今後の方向のひとつとして理解していただきたい。最後に当館を取り巻く考古学関係の世間の様子を見てみる。平成8年度、指宿市が考古博物館「時遊館C o c c o 橋牟礼」をオープンさせる。鹿児島市は平成9年春、「ふるさと考古歴史館」をオープンさせる予定である。二つの館は共に目玉となる全国的にも有名な遺跡資料（指宿市一橋牟礼川遺跡、鹿児島市一掃除山遺跡・草野貝塚など）を抱えて、展示方法も最新の機材をフルに使ったものになるであろう。今後もこのような動きは増えてくるかもしれない。そのような中で当館がどう個性を主張するか。それは県の施設であるという自覚に尽きると思う。県でなくてはできないこと、これに徹するしかない。全時代・全県的に現物で資料を提示できるのは当館において他に無いのである。その利点をフル活用して鹿児島県の歴史・文化をトータルで表現できるよう、より充実した内容で鹿児島島のむかしを再現してみたいものである。

参 考 文 献

- 河口貞徳（1988）『日本の古代遺跡』38鹿児島：246p、保育社、大阪
- 朝日新聞社編（1989）『朝日百科日本の歴史』1 原始・古代：352p、朝日新聞社、東京
- 中村耕治他（1989）「大隅地方の古墳調査一墳丘測量を中心として一（1）曾於郡大崎町横瀬古墳」
『鹿児島考古』第23号：pp. 55-66 鹿児島県考古学会、鹿児島
- 近藤義郎編（1992）『前方後円墳集成』九州編：539p、山川出版社、東京
- それぞれの遺跡の資料に関しては、該当する報告書を参考にしたがここでは割愛する。